



# みどりの風

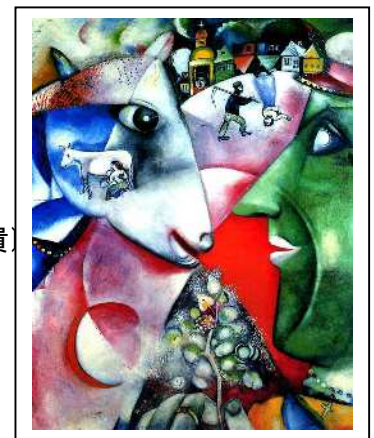
平成28年11月30日発行  
校報 第536号  
〔みどりの風 第79号〕  
練馬区立関町北小学校

## この絵、わたしはこう見る

校長 大野 泰弘

6年生の教室前の廊下に、6年生自身が7枚の絵から1枚の絵を選び、その絵に対して自らが感じ取ったこと、読み取ったことなどを書き表した文章が掲示されています。その一部をご紹介します。元の絵は、「シャガールの私と村」という絵です。授業の中では、6年生が先入観をもたないようにするため、画家の名や絵のタイトルは伏せてありました。〔実際の絵の色調については、お手数ですが、美術書やインターネットでご確認ください。〕

ぼくは、この絵は「人と動物が共存できる社会をめざす」ということを表しているのではないかと思います。なぜかという、この絵には、右に人、左に馬がいます。その右の人は、手に花のようなものを持っています。これは、馬への感謝を伝えようとしていると思いました。それに、右にいる人と左の馬が宝石のように目が輝いていることから、男の人と馬は相当仲がよいということも分かりますね。これらのこともまじえ、この絵は「人と動物が共存できる社会をめざそう」という絵だと思いました。〔1組男子 井口晴貴〕



私は、この絵から、「仲間(動物)はとても大切なんだよ」ということを読み取りました。まず、絵の全体を見てください。動物と人間が見つめ合っているのが分かります。

そして、そのまわりには動物と人間との思い出や日常の様子が表されています。作者は、「仲間とは自分にとって、とても大切な存在だ」と伝えたかったのではないのでしょうか。このようなことから、仲間とはなくてはならない存在、そして、これからも仲間を大切に、と伝えたいのではないかと思います。〔2組女子 栢田凜央〕

この絵には、「笑っている」、「怒っている」、二つの表情が交わっている。そんな第一印象を最初に心で、目で感じました。そして、この絵から、作者は「思い出を語り合っている」ということを伝えたいのではないかと思います。絵の上の方を見てください。カマを持っている男性と青いスカートを身にまとった女性。そして、黄色い教会の中に男性の姿が…。色使いも暗く、怖いオーラを感じます。下の方を見てください。ヤギの中にどこまでも続く青空。パッと見てみたら、上の方とは違って、明るいオーラを放っています。このようなことから、男の人とヤギは、つらい思い出も二人でいれば大丈夫、楽しい思い出も二人でいれば、倍の楽しさを感じられる。たとえ人ではなく動物だとしても、「心」があるかぎり、分かり合える。そういうことをこの絵から読み取りました。〔3組女子 菅原裕希子〕

芸術作品の楽しみ方・鑑賞の仕方には、こうしなければならないということはないようで、例えば、

作品を難しく考えるのではなく、自分の目で見て、自分の感性で捉えて、作品の世界を味わうことができているか。

知識の多さではなく、作品に対する自分なりの価値観を見出しながら、作品の世界を楽しむことができているか。

感動のあまり、その場に立ち止まってしまうような出会いを求めて鑑賞できているか。等々

基本的には「芸術作品を見るのが好きだ」という思いが大切なのでしょう。例として挙げさせてもらった3人の6年生は、シャガールのことも「私と村」という作品のことも知らなかったわけですが、それぞれの感じ方・見方・考え方には、どれもその子らしさやそう捉えた根拠が表れていて、思わず「なるほど」と納得できます。

ところで、12月9日(金)から11日(日)まで展覧会が開催されますが、その中日である10日(土)には、このように「一枚の絵を感性で、自分らしく」捉えることを学習した6年生が「子ども学芸員」となって、来校される方々に各学年の作品のよさや工夫などを解説してくれることになっています。その解説の中には、おそらく6年生なりの作品のとらえ方も含まれているのではないかと思います。

芸術作品を楽しむコツの一つに「学芸員の方に作品のことを訊いてみる」こともあるそうです。関町北小学校に通う子どもたちが「ワンダーランド SEKIKITA」のテーマのもとに制作した数々の力作を、ぜひ皆様の目で見て、心で感じて楽しんでいただけたらありがたく存じます。多くの皆様のご来場をお待ちしております。

さて、今月9日から11日まで、今年度の展覧会が開催されます。次回からはこのような6年生が、子ども学芸員となって

美術に馴染みのなかった人は、「自分には美術はわからない」敬遠しがち。しかし、美術とは本来、「わかる」とか「わからない」というものなのでしょうか？

美術が「わかる」とは、ひとつには美術に関する知識が豊富なことをさします。「モネは印象派を代表する画家で、絵の具を混ぜない筆触分割という画法で作品を描いた」というようなことを知っていると、「美術が『わかる』人だな」とみなされるわけです。そしてもうひとつ、「見る眼」があることを美術が「わかる」という場合もあります。作品をひと目見るやその価値を鋭く見抜き、見定めることができれば、「わかる」人ということになってしまうということ。

でも、ここで考えてみるべきは、そもそも私たちはなんのために美術を見るのかという点です。少なくとも普通の人は、研究のためでも作品売買のためでもなく、もっぱら「楽しむ」ために美術を見るはず。絵や彫刻を見て「おもしろいな」と思ったり、「すごい！」と感動したり、なにかピンとインスピレーションを感じたりすることを、私たちは楽しんでいるということ

です。しかし、「楽しむ」ために必ずしも知識は必要ではないでしょう。「見る眼」も、普通の人が普通に美術を楽しむ際には、それほど関係ありません。むしろポイントは、人それぞれの価値観に作品がピタッとくるかどうか。つまり作品に対する自分なりの価値観を見いだすことができれば、それでよいということ。そう考えると、「美術がわかる」とは、「自分なりの価値観で美術を見て楽しむこと」だとわかるはず。知識がなくても問題はなく、「見る眼」も自分の価値観で決めればよいということ。だから、仮に知識がなくても、臆することなく美術と向き合っていけばよいのだと著者は記しています。（

美術鑑賞というと、なにか難しい解釈が必要で、豊富な知識と高度な洞察力がないと務まらないと思ってしまうがち。場合によっては、それで劣等感を抱くこともあるかもしれません。しかし著者は、「見たまま、感じたまま」でまったくOKだとい

います。しかも、そこにはちゃんとした根拠があるのだとも。「見たまま、感じたまま」というときの、「見る」や「感じる」

をしているのは自分自身。ということは、「見たまま、感じたまま」とは少なくとも自分の眼で見て、自分の感性で感じているということ。これは、とても重要なポイントだといいます。つまり、そこには「自分」があるということ。

本などから得た知識を語ることに比べると、「見たまま、感じたまま」には少なくとも「自分」があります。たとえ難しいことを知らなくても、本当に心を揺さぶられたり感激したりするのであれば、それは「自分」の心が反応しているということ。それこそが、価値ある鑑賞体験だという考え方。

レベルやクオリティの違いよりも、「自分」が核になっていることの方が大切なのです。「自分」ながければ、いくら絵や彫刻を見てもたいした意味はないということで、「見たまま、感じたまま」は意義ある鑑賞の出発点であるというわけです。（

私は次のような点を”観るときのポイント”としています。

- 自分の感性で自然に観る。

あまり難しく考えずに、いろいろな美術品に対する知識がなくても、直感で観て感じればいいんですね。

- 「雑誌や他の人が観ていいと言ってたから」行くのではなく、自分が観たいから行く。

- 美術館に行って「心が豊かになりたい」「美しいものを見たい」とか率直な気持ちで観る。

- 賞賛されている絵を観て何も感じなかったとしても、人それぞれ美しいと思う基準は違うので、「自分にはこの絵の良さがわからないのだろうか」などと思わない。美術解釈なども時代とともに新たな解釈が生まれたりすることもあるので、その時自分が感じたままがいい。

- ”一目見て立ち止まってしまうような絵との出会い”、”感動で時を忘れてしまうような出会い”を求めてワクワクしながら美術館に行く。

美術鑑賞は基本的に自分の感じるままでもいいと思いますが、次のようなことをやってみると、今まで見えなかったようなものが見えてきて深く作品を感じれるようになりますので、どれか一つでもやってみることをおすすめします！

- 興味が引かれる作品があったら、近寄って観てみたり、少し離れて観てみる。
- 好きな画家を見つける。
- 画家のことを調べてみる。
- 気になる作品や・感動した作品があったら、メモしておくとき調べるとき便利。
- この画家のどんなところが好きなのか、考えてみる。

例えば絵そのものなのか・色使いなのか・モチーフなのか・・・

- 1回見終わったところで、また最初から観てみて自分の気になる絵を重点的に観る。
- 気になる絵があったら時代背景、制作背景なども調べてみる。大きな作品展では絵を順に追っていけば画家の心の移り変わりなども伝わってくる場合がありますからね。
- 気に入った作品とたくさんあえた展覧会では、図録(カタログ)を買ってみる。

人によってはなかなか美術館を楽しめないな～って方もいるかもしれません。そんな方は次のことを意識されるといいのかな～と思います。

- 正しい鑑賞法とは別にありませんので、自由な見解で楽しみながら、とにかく数多くの画家・作品を観てみる。そうすることによって、自分なりの鑑賞の仕方が出来上がっていくものなんですね。
- 美しさを理解する感覚というのは「学習」することによって、得られていくようで、生まれつきの感覚ではないそうです。美術館に行くってことは、そういう感覚も育ち、磨かれていくことになるんです。

●大事なことは、絵を観ることが好きで、その絵の前から離れられないような出会いを求めて、いろいろ観に行くことです。

テレビの美術番組も美術館の特集をしたり、画家にスポットをあてたりしているものがありますので、事前に番組を観てから行くことも参考になりますよ。

何か一つのものに興味を持てるようになると、その見方が深くなり、他の作品や作家にも同じように興味を持てるようになって、どんどん幅が広がっていきます。

あと最近の美術館はカフェやショップがおしゃれだったりするので、そちらの方も楽しめますよね。

美術館の楽しみ方

## 1: チラシと実際の絵を比べてみる

美術館の目玉となる作品はチラシなどの表紙として印刷されていますよね。そのチラシの絵と実際に美術館でみた絵を比べたことはあるでしょうか？

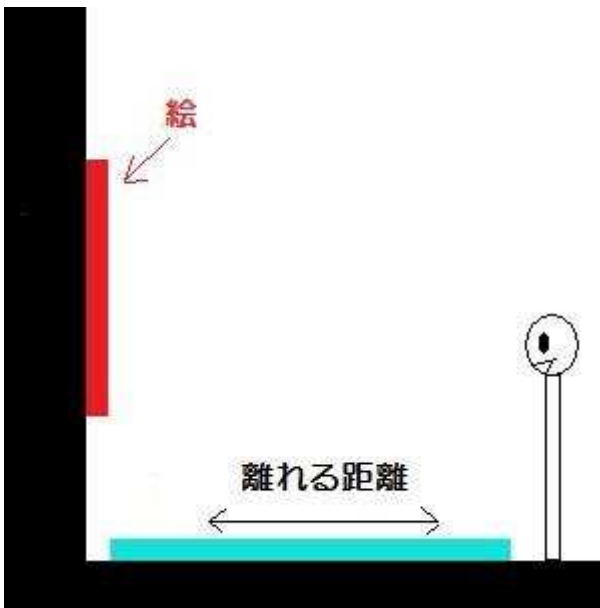
実は、チラシの絵と実物では素人でもわかる大きな差があります。それは作品の「ひび割れ」です。特に古い油絵だとわかりやすいです。

チラシに印刷されている絵は基本的にカメラで撮影しているものが多く、カメラの光は強いいため作品のひび割れ部分がより影として際立ってしまいます。

そのため「チラシの絵はひび割れがひどいのに、実物はそんなにひび割れないぞ？」というギャップに気づきます。こういった違いを見つけるのも美術館鑑賞の魅力です。

ヨハネス・フェルメール作「真珠の耳飾りの女（別名：青いターバンの少女・ターバンを巻いた少女）」は、特に現物とチラシの差が激しいです。見比べるのにちょうど良い作品だと思います。

## 2: 全体を観るときは作品の縦の長さの分だけ離れて観る



(photo by 著者)

作品全体を観たいとき、一番ベストな立ち位置はどこでしょうか。それは作品の縦の長さ(床との距離も含む)と同じくらいの長さの分だけ離れることです。

その位置が、ちょうど作品の全体を観ることができ、視界に余分な空間も入りにくいです。

混雑しているときには、人の邪魔にならないように立ちましょう。また、作品と距離をとる分、作品と自分との間に人が行き来してしまいます。

### 3: 作品の意味を事前に理解しておく

これは展示されている作品が何かわからないとできないことですが、展示される代表作はわかると思います。

それならば、その絵について「描かれた理由」「描かれた時代」などを事前に調べておくと、その作品についてより理解が深まり楽しめます。

例えばパブロ・ピカソの代表作「ゲルニカ」。スペイン内戦中に空爆を受けた町ゲルニカを描いています。そう考えると、この作品に描かれた戦争の悲惨さがより伝わってきます。

ちなみに「ムンクの叫び」というのを「作品名」と思っている方がいますが、正確にはエドヴァルド・ムンクが描いた「叫び」という作品です。一般的に知られている作品も、意外と勘違いされている部分があります。

### 4: 音声ガイドを利用する

美術館によっては持ち運びができる**音声ガイド**を貸出しているところがあります。

これは音楽プレイヤーのように、イヤホンをつけて楽しむものです。一部の作品に番号がつけられており、その番号を音声ガイドに入力すると作品の解説が流れます。

美術館によっては、番号操作をしなくても作品に近寄るだけでセンサーが働き、自動で再生されるものもあります。

## 5:学芸員の話聞いてみる

美術館によって、学芸員の無料講習会を開いているときがあります。それらはチラシやホームページで確認ができます。

人数制限があるところがほとんどですが、一度参加してみると面白いですよ。美術や作品についてさまざまなことを知れます。

この楽しみ方を知った経緯

大半は美術館通いをしている間に自然と身に付いた楽しみ方ですが、1と2は美術の先生や美術館の学芸員の方に教えていただいた方法です。

美術館では絵を鑑賞するのがメインですが、学芸員と話をするのもとても楽しいですよ